

高き志【にころざし】

「生きる力」…スポーツ界でも

この年末・年始はいつも以上に家で過ごす時間が多くなりました。そんな中、楽しみだったのは、高校生や大学生のスポーツ大会に関するテレビ放送でした。高校バスケのウインターカップ男子決勝、箱根駅伝はどちらも最後の最後に大逆転があり、正にスポーツは筋書きのないドラマであると感動しました。高校サッカーの男子決勝は、延長からPK戦となり、最後までどちらに転ぶか分からない素晴らしい試合でした。さらに、選手同士の間関係がドラマをさらに感動的にしていました。

そんな中、試合の内容や勝敗とは別に、とても感慨深い気持ちで見た試合がありました。それは、春の高校バレー女子の決勝です。決勝で戦ったのは、優勝した岡山県の就実高校と準優勝だった大阪の大阪国際滝井高校でした。試合を見ながら私は、この2チームの監督に目が行ったのです。どちらの監督ともに、試合中は後ろ手に手を組み、大声を出すこともなく、表情も変えずに冷静に指揮を執っていました。さらに興味深かったのは、作戦タイムの様子です。どちらのチームも、監督が少しアドバイスをした後、選手がお互いに気づいたことを出し合ったり、励まし合ったりしているのです。

私が選手をしていたころのバレーボール界は、東京オリンピックで金メダルを獲った女子バレー大松監督の「俺についてこい！」という言葉に象徴されるような、強権的な指導がまだまだ主流の時代でした。体罰は当たり前で、サーブをミスしただけでビンタを打たれたり、練習試合はもちろん公式戦の途中でビンタを打たれたりしていました。（大松監督や当時の私の監督を否定しているわけではありません。時代が違ったのです。）また、学童バレーの監督をしていた時代も、強豪チームの指導方法はまだまだ強権的な指導が主流でした。ミスをするたびに自分の腿をたたき、監督の顔色をうかがう子供たちの姿を見ながら、暗い気持ちになっていたのを思い出します。このような指導の中では、選手は考えなくなります。ただ、監督から言われることをミスなくプレーすることだけを目指すようになるのです。

前述の高校バレーに話を戻すと、この2チームの監督には共通点があると感じました。それは、「自ら考え、判断し、プレーできる選手を育てる」という意思が感じられることです。私は、そんな二人の監督が率いるチームが優勝を争ったことに深い感慨を持ったのです。「高校女子バレー界もやっとなんな時代が来たか」と。以前ほどではないまでも、高校女子バレーを見ていると、まだまだ強権的な指導が存在しているように感じます。また、精神論を押し付けるような指導も多くあるようです。直接関わっているわけではありませんから、これらはあくまでも主観です。しかも、全国優勝勝ち取る困難さなど全く知らない私ができるようなことではないことも分かっています。しかし、決勝を争った二人の監督が選手の主体性を重視されていることだけは間違いのないと思います。

もちろん、選手の主体性を重視する傾向はバレーボールに限ったことではありません。現在のスポーツ界では「自ら考え、判断し、それをプレーできる選手」を育てることがとても重要視されていると感じます。それは、試合の場面に限ったことではないのです。何のためにこの練習をするのか、自分やチームの課題を克服するためにはどんな練習をするべきなのか、こんなことを考え、判断し、実行できる選手やチームが本当に強くなっていくのです。

学習指導要領では、私たちが育成しなければならない「生きる力」を定義してあります。それは三つ示されており、その二番目に「思考力・判断力・表現力」があります。しかも三番目には「学びに向かう力・人間性」として主体性も重視されているのです。これらは、二人の監督が重要視しているであろう「自ら考え、判断し、それをプレーできる選手」に直接的につながるものだと感じます。加えて、生きる力の残りの一つは「知識・技能」です。スポーツ界では、選手個人個人にしっかりした技術・技能が身につけていないと強くなれないことは言うまでもありません。

こう考えてみると、スポーツ界で強くなるための重要な要素と「生きる力」にはつながりがあると見えそうです。